

---

# 心を開いて～僕と彼女の日常～

翔希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心を開いて～僕と彼女の日常～

### 【Zマーク】

Z4909H

### 【作者名】

翔希

### 【あらすじ】

僕の目線で日常を描く。心の動き、気になるあの人の存在、誰もが被る仮面……。学校と電車内での物語。すべての物事が僕を変えれる。僕は、高校に入つてどんな日常を送ることになるんだろう。

## 第一話・すべての始まり

夏の暑い日差しの中、僕は顔をあげた。

「つ！　はあ……」

照りつける太陽の光。腕で目へ届く刺すような光を遮る。ため息がかかる。

今は夏休み。僕は高校生。一年生だ。最近、部活が忙しくて、疲れてしまふがない。

「おかしいなあ……」

僕は、春、コンピュータ部に入った。商業高校の情報科に入ったので、それは当然の流れだと思つ。運動苦手だし。でも……

「まさか夏休み中も毎日あるとは……」

どこの商業高校もそうだと思うが、僕の高校も部活動が活発なのだ。夏休み中も、土日以外は毎日あるし、9時から3時まで、昼をはさんで部活をする。それなのにパソコンには一日に一度、触るか触らないかだ。ずっとコンピュータの仕組みや、プログラミング言語について、机に向かつて授業の様に説明を受けるだけ。こんなはずじゃなかつた。なんで僕はこんな部活を選んでしまつたんだろう。

「……暑つ……」

今は学校からの帰り道。照りつける太陽の下、駅まで歩いている最中だ。学校からはバスも出ているのだが、今朝あることに気がついた。……アホといわれても仕方ないかもしね。定期の期限が過ぎていた。昨日で期限切れ。今日は月曜日。8月1日。気がつかなかつた……。ということでがんばつて歩いている。今朝はそのせいで遅刻してしまつた。顧問にこつたり叱られた。仕方ない。でも、幸いなことに、電車の定期は10月までだから、まだ大丈夫だつた。歩く。ただひたすらに。照りつける日差しの中、汗を流しながら、重たい足を一步、また一步、前へ進める。そのうち小さくLOFTが見えてきた。駅の隣に立つてゐる、その大きな商業施設にはよく、

お世話になっている。中は涼しい。ダイヤの間隔は、ほんの数分だが、その数分だけでも涼んでいたい。僕はそう思つて、ゆっくり走り出した。駅近くのスクランブル交差点が見えてくる。青信号だ。道路を斜めに切る。自動ドアが見えてくる。少しづつ、少しづつ近づいてくる。もう少し。開いた！

「…………えっつ！」

ここはどうだらうか。目の前が真っ暗だ。背中が冷たい……。あれ？ 僕、横になつてゐる？ あ、目も閉じてたんだ……。ゆっくりと目を開ける。

「つ！」

照りつける太陽の光。左手で体を起こしつつも、腕で目に届く刺すような光を遮る。ちょっとだけ、気絶していたようだ。そのせいか頭が痛い。変な倒れ方をしたんだろう。その時始めて声に気がついた。

「大丈夫ですか？ おーい！ 大丈夫？」

あわてて返事をした。

「あ！ すみません、すみません！」

返事というより、謝ったというべきか。多分この人がぶつかつた相手だろう。……あれ？ 笑われてる……。そう、笑い声が聞こえるのだ。それも、可愛らしい笑い方の。頭をあげ、その人の顔を見る。

「翔ちゃん、人通りの多い所で走っちゃダメだよ？」  
「麗さん！」

ぶつかつた相手は同じクラスの村瀬麗、その人だつた。特に親しいわけではない。あまり話したこともないし。今「翔ちゃん」と呼ばれたけど、クラスの皆が僕をそう呼ぶから、特別な事じやない。しかし、同じクラスの子だつたとは、恥ずかしいな……。

彼女も同じ部活をやつている。隣町に住んでいるから、同じ電車になることが多いが、彼女はいつも本を読んでいる。だから、あまり話せないでいる。友人である隼人はやとによると、彼女は成績優秀、運

動そこそこ、容姿は上の中らしい。隼人は女好きだから、よくクラスの女子の話をしてくれる。……そんなことはどうでもいいんだよ。

謝んなきや。いや、謝つたけど、もう一度さ。

「ごめん、涼むことで頭がいっぱい……。あ、そつちは大丈夫だった？」

彼女は、また可愛らしく笑う。

「そつかあ、でも、今度からは危ないことしちゃダメだよ？ それに、ぶつかったのは、私じゃなくて、大きな女の。ところで、もう帰るところ？」

ふと腕時計を見る。あ、あと一分で電車が来るじゃないか。帰んなきや。

「うん。あと一分で電車も来るし」

「じゃあ、帰り、少し話そうよ。あまり話したことないでしょ？」

嬉しかった。……なんとかよくわからないけど、嬉しかった。

「うん。いいよ。じゃあ急げ」

「その前に、立とつか」

ぼくは、座り込んだままだった。急いで立ち上がり、笑って「まかした。よく見ると、周りからは痛い視線が降り注がれていた。

「じゃ……」

行こうかと言おうとしたその時、救急車の音が聞こえた。

「なんだろうね」

僕は、彼女に対して言った。その時、彼女は、思い出したように、「あ、そういうえば、さっきまで翔ちゃんのぶつかった女人も近くにいたんだ。時計見るなり、慌ててすぐ駅行っちゃったんだけど……。その人が救急車呼んだんだ……。あはは」

……あはは、じゃないよ。どうするの、僕もう元気なのに。にしても、その女人の人も、僕が目を覚ますまで近くにいてくれたつていのに。救急車がすぐそこで止まる。

「意識不明の男性はどうですか！」

ははは……どうしよう。

「意識不明の男性はどうですか！」

僕は、対応に追われることになった。その間も、彼女はしつかり待っていてくれた。結局、一本あとの電車で帰ることになったのだった。

## 第一話・すべての始まり（後書き）

この小説サイトへの初投稿作品です。  
なので、温かい目で見守つてほしいです、はい。  
色々ご指摘なども頂きたいと思います。  
これからも、よろしくお願ひいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4909h/>

---

心を開いて～僕と彼女の日常～

2010年10月23日13時39分発行